

介護老人福祉施設における レクリエーション活動についての実態調査

Research on Recreational Activities in Nursing Homes for Elderly People in Japan

稲垣 貴彦
Takahiko INAGAKI

(要旨)

全国の介護老人福祉施設を対象に、レクリエーション活動の実態について、質問紙による郵送調査を行った。その結果、①レクリエーション活動の頻度や内容は、以前と変わっていないが、入居者の意見をとり入れるなど工夫がなされ、満足度も高い傾向が認められる。②スタッフも充実し、ボランティアや講師などが外から訪れて活動を支える機会も多くなっている。③障害の重い入居者や認知症の方が増え、活動が制限される人への対応という課題がある。④ユニット型の施設が増え、レクリエーション活動を含め、個々の生活支援に重点が置かれるようになった。⑤介護福祉士養成校におけるレクリエーションについての知識や技術の習得は重要だと考えられている、といったことが明らかになった。

キーワード：レクリエーション 介護老人福祉施設

はじめに

介護保険制度が始まって10年経過し、わが国の介護をめぐる状況は大きく変わってきている。特に介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)では、ユニットケアが導入され、入所者の生活の質を高めるために、日々新たな取り組みがなされている。

われわれは、1995年に、岐阜県の福祉施設(高齢者・障害者の施設)を対象に、施設でのレクリエーション活動の状況を把握しようと試みた。今回は、介護老人福祉施設を対象に、改めてレクリエーション等の日中活動の実態を把握し、レクリエーション活動についてのスタッフの考え方を把握することを目的として、また、介護現場、特にユニット型の施設の日中活動についての新たな課題や動向を浮き彫りにすることを目指して、アンケート調査を行った。

介護福祉士の資格を取得するための制度は、2012年から改訂される予定であり、それにむけた養成校での新カリキュラムが始まっている。しかし、新カリキュラムでは、従来の「レクリエーション活動援助法」に替わるレクリエーションに関する専門科目は廃止され、それぞれの養成校では、「介護の基本」や「生活支援技術」など、関連する科目のなかで、レクリエーションについての学習が進められている。この改訂により、従来かなりの学習時間をあてがわれていた「レクリエーション」や「家政(被服・調理・住居)」などの扱いが養成校の自由裁量となり、事実上縮小されつつある。

この改訂の背景には、資格のための知識や技術として、レクリエーションは実際にはあまり必要ないという

考えがあると想定される。しかし、実際のところ、介護現場では、レクリエーションなどの活動は重要ではないのか。これを確認することが、この調査を実施するもう一つの目的である。現場の利用者やスタッフは、レクリエーション(日中活動)をどう考えているのか、どのように実践しているのか、また養成校におけるレクリエーションについての学習をどう考えているのか、こういったことを明らかにしていくことで、新カリキュラムの学習内容を再検討することもできると考える。

1 調査の概要

(1) 調査対象施設の選定

独立行政法人福祉医療機構が運営する「WAMNET」のリストに2010年8月31日の時点で掲載された全国6,320の介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)から、階層抽出法により、各都道府県ごとに10%の施設を選び、632施設を対象とした。

(2) 調査の方法 質問紙法による調査(郵送)

(3) 調査項目は、以下のとおりである。

- ・施設の種類(新型・ユニットか従来型か)
- ・利用者数
- ・毎日の日課の状況
- ・レクリエーション活動の状況
- ・クラブ活動の状況
- ・外出活動の状況
- ・レクリエーション担当者の有無
- ・レクリエーションの運営体制
- ・日中の活動(レクリエーション)についての評価

- ・入居者の満足度
- ・ユニットケアが導入されてからの変化
- ・日中活動(レクリエーション)についての意見
- ・養成校の学習内容への意見

(4) 調査期間 2010年9月から11月

(5) 回収率 632施設のうち、266施設から有効な回答が得られた。回収率は42.1%である。

2 調査の結果

(1) 施設の種類の規模

まず「施設の種類の種類を教えてください」と尋ね、その種類を次の3つから選んでもらった。①「相部屋(従来型)」が175施設(65.8%)、②「全館ユニット(新型)」が60施設(22.6%)、③「一部ユニット(別館も含む)」が31施設(11.7%)であった(図1)。

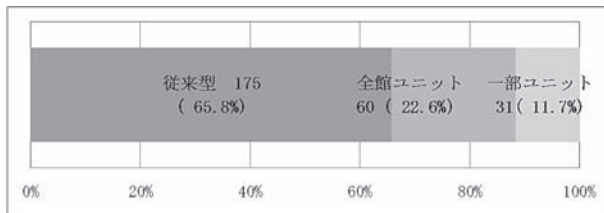


図1 施設の種類の種類

次に「現在の入居者数は何名ですか」という設問で、以下の選択肢から選んでもらった。①30～49人が13施設(4.9%)、②50～69人が113施設(42.8%)、③70～89人が、65施設(24.6%)、④90～99人が20施設(7.6%)、⑤100人以上が53施設(20.1%)であった(無回答2)。

従来型と、ユニット型の施設で比較してみると、新設の全館ユニット型の90人以上の規模の施設数が、従来型および一部ユニット型に比べ少なくなっている(図2)。

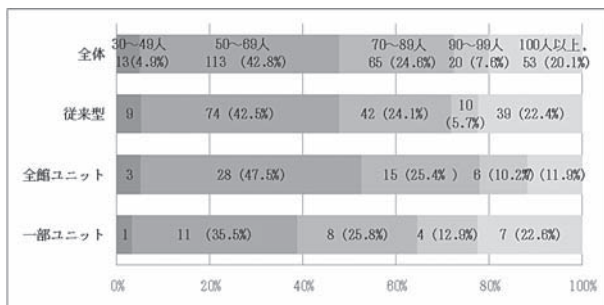


図2 施設の入居者数

(2) レクリエーション活動の状況

レクリエーション活動の状況として、(a) 毎日の日課として行っているもの、(b) 定期的に行っているゲームなどのレクリエーション活動、(c) クラブとして行っているもの、(d) 外出して行っているもの、の4つにわけて聞いた。

(a) 「複数の入居者を対象に、毎日の日課として行っている活動はありますか」という設問で尋ねた。①「いいえ」が66施設(24.9%)、②「はい」が198施設(74.2%)である(無回答2)。

従来型とユニット型の施設で比較してみると、ユニット型の施設の方が「活動を行っていない」と答えた施設が多くなっている(図3)。

そして「それはどんな活動ですか」とその内容を記述して(別掲の活動リストから選んで)もらった。

日課として最も多い活動は「体操」であり、ラジオ体操、嚙下体操、リハビリ体操など、毎日なんらかの体操を行っている施設は154(全体の57.9%)あった。

他に、「テレビ観賞」「音楽鑑賞」「集団ゲーム」「カラオケ」などを日課として挙げた施設があったがいずれも全体の1割程度であった。なかには、「洗濯ものたたみ」や「紙芝居」という回答も数施設あった。

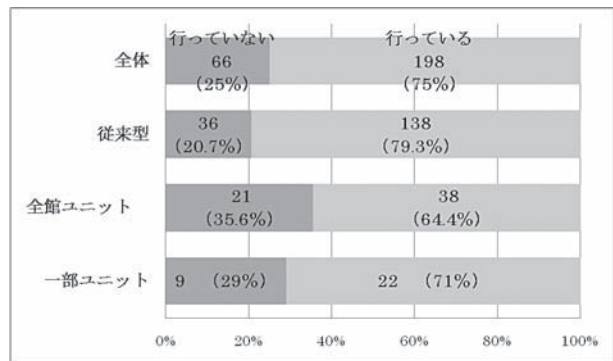


図3 毎日の日課として活動を行っているか

(b) 「複数の入居者を対象に行っているレクリエーション活動はありますか」という設問で尋ねた。①「いいえ」と答えた施設は16(6.2%)、②「はい」が249施設(95.8%)であった(無回答1)(図4)。

そして「それはどんな活動ですか」とその内容を記述して(別掲の活動リストから選んで)もらった。

レクリエーション活動としても、「体操・踊り」が一番多く、その他「集団ゲーム」「テレビ観賞」「カラオケ・歌」など、毎日の日課と同様の種目が多く挙げられた。具体的には「紙芝居」「輪投げ」「玉入れ」「風船バレー」など定番のゲーム種目を記述した例が多かった。

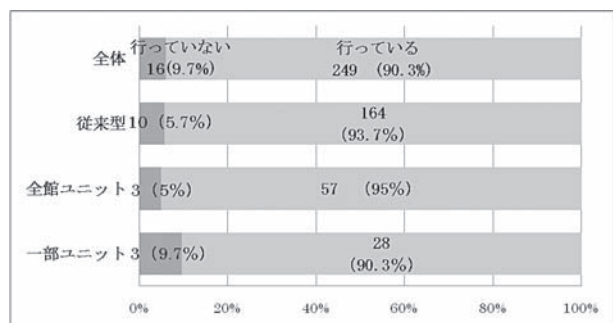


図4 レクリエーション活動を行っているか

前問に「はい」と答えた施設に、さらに「どれくらいの頻度でやっていますか」と尋ね、次の選択肢で答えてもらった。①「ほぼ毎日やっている」が48施設(19.8%)、②「一週間に3～4日」が30施設(12.4%)、③「一週間に1～2日」が76施設(31.4%)、④「1ヶ月に2、3回」が50施設(20.7%)、⑤「1ヶ月に1回」が29(12%)、⑥「その他」が9施設(3.7%)であった(無回答10)。

従来型と、ユニット型の施設で比較してみると、従来型が、「毎日やっている」および「週に3、4回やっている」と答えた施設が多くなっており、ユニット型の施設よりも活発にレクリエーションを行っていることがうかがえる(図5)。

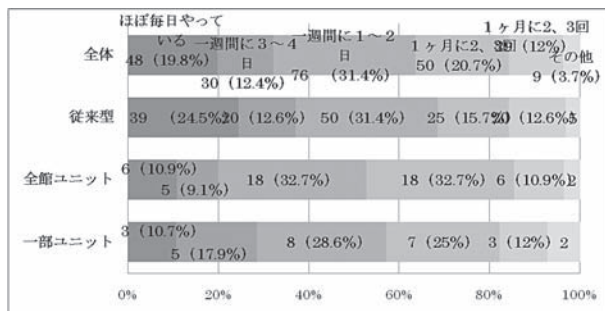


図5 レクリエーション活動の頻度

(c)「入居者が主体的に参加するクラブ活動などを行っていますか」という設問で尋ね、①「いいえ」、②「はい」という選択肢で答えてもらった。②「はい」と答えた施設は、148(56.9%)である(図6)。そして「それはどんな活動ですか」とその内容を記述して(別掲の活動リストから選んで)もらった。「書道」「音楽(楽器演奏やコーラス)」「詩吟」「茶道」「華道」といった活動が多かった。「お話の会」「外気浴」という記述もあった。

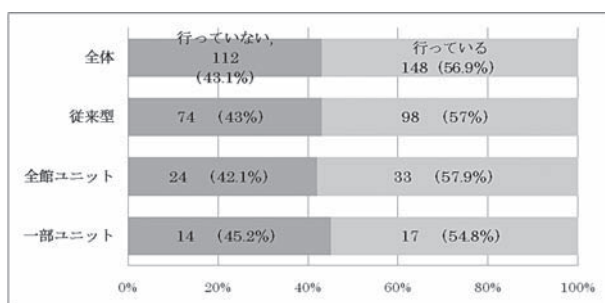


図6 クラブ活動を行っているか

前問に「はい」と答えた施設に、さらに「どれくらいの頻度でやっていますか」と尋ね、次の選択肢で答えてもらった。①「ほぼ毎日やっている」が48施設(19.8%)、②「一週間に3～4日」が30施設(12.4%)、③「一週間に1～2日」が76施設(31.4%)、④「1ヶ月に2、3回」が50施設(20.7%)、⑤「1ヶ月に1回」が29(12%)、⑥「その他」が9施設(3.7%)であった。

従来型とユニット型の施設で比較してみると、従来型が「毎日やっている」および「週に3、4回やっている」と

答えた施設が多くなっており、ユニット型の施設よりも活発にレクリエーションを行っていることがうかがえる(図7)。

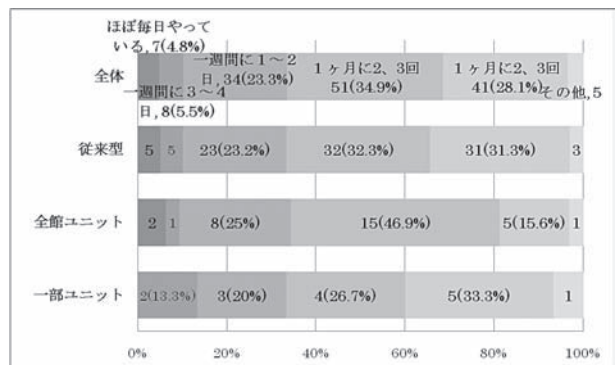


図7 クラブ活動の頻度

(d)「施設の活動として、入居者が外出して社会資源を利用することはありますか」という設問で尋ね、①「いいえ」、②「はい」という選択肢で答えてもらった。②「はい」と答えた施設は、232(87.9%)である(図8)。

さらに「どんな所へ行きますか」とその内容を記述して(別掲の活動リストから選んで)もらった。内容としては、「買い物でスーパー等にでかける」が最も多く、次いで「食事」「博物館・美術館」「公園」「地域行事」などが多かった。

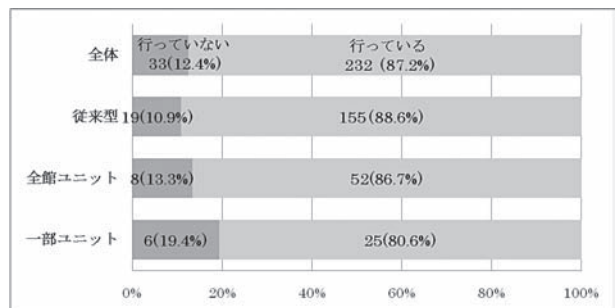


図8 外出して社会資源を利用することがあるか

さらに、「1人あたり平均どれくらい外出していますか」と尋ね、以下の選択肢から答えてもらった。①「一週間に数回」が3施設(1.3%)、②「1ヶ月に2、3回」が12施設(5.2%)、③「1ヶ月に1回」が41施設(17.6%)、④「1年に7～10回」が17施設(7.3%)、⑤「1年に3～6回」が70施設(30%)、⑥「1年に1～2回」が81施設(34.8%)、⑦「その他」が9施設(3.9%)であった(無回答6)。

従来型と、ユニット型の施設で比較してみると、「外出して社会資源を利用することがあるか」という設問に対しては、従来型がユニット型の施設より若干多く持っている。一方、外出の頻度については、従来型の施設が、「年1、2回」および「3～6回の外出をする」と答えた割合が多く、ユニット型の施設の方が外出の頻度が多い傾向が認められる(図9)。

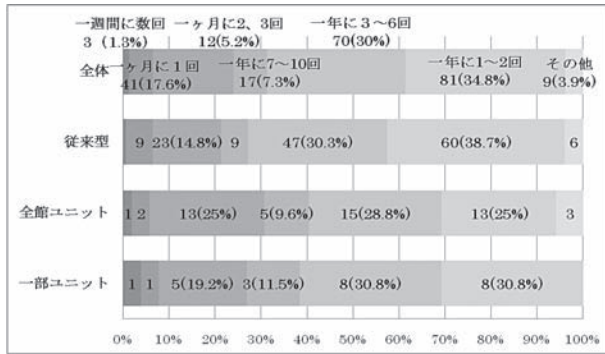


図9 外出の頻度

(3) レクリエーション活動の担当者

「レクリエーション活動は、だれがどのように担当していますか」という設問で、つぎの選択肢から選んでもらった。①「専門の担当者を設けて、その人が主導している」が39施設(14.8%)、②「スタッフの中で担当(当番・委員など)を決めて、その人が主導している」が174施設(66.2%)、③「特に決まっていない」が50施設(20%)であった(無回答3)。

従来型の施設では、ユニット型に比べて、専門の担当者を設けている施設および当番・委員などを決めて担当している施設が多くなっている(図10)。

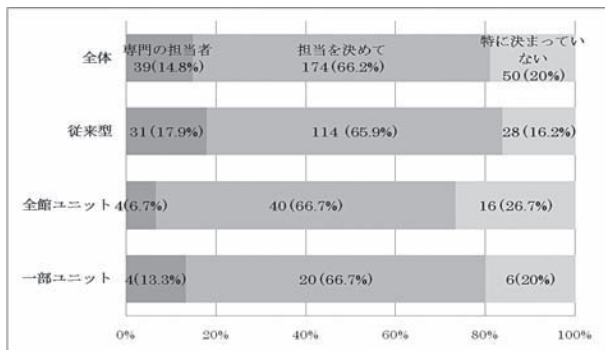


図10 レクリエーション活動は誰がどう担当しているか

前問で①、②を選んだ施設に、「レクリエーション活動を担当しているスタッフは何人いますか」と尋ねた。213施設のうち、「1人」と回答したのが10施設、「2人」が25施設、「3人」が32施設となっている。30人以上の担当を配置している施設は15であるが、そのなかには、職員全員で担当している、と回答した施設も含まれている(図11)。

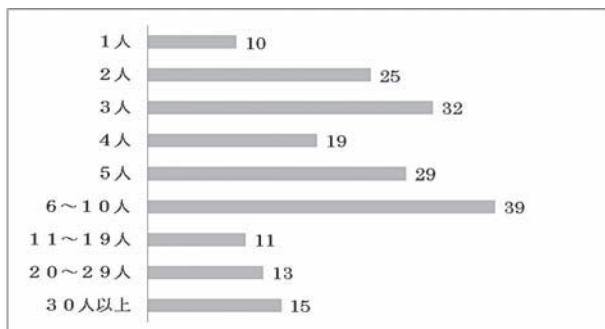


図11 レクリエーション活動担当者の人数

同様に、前の問いで①、②を選んだ施設に、「レクリエーション活動を担当している人は、日本レクリエーション協会の公認する、レクリエーションインストラクターや福祉レクリエーションワーカーなどの資格を持っていますか」と聞いた。

「レクリエーションインストラクター」を取得しているスタッフがいると答えた施設は25、福祉レクリエーションワーカーについては10施設であった。

次に、「レクリエーション活動を主に担当している人は、どんな職種ですか」と聞き、次の選択肢から択一で選んでもらった。① 介護士(ケアワーカー)が164施設(78.1%)、② 生活相談員が14施設(6.7%)、③その他が7施設(3.8%)であった。複数の職種がかかっていると答えた施設が25(11.9%)あった。介護士が生活相談員といっしょに担当している施設が多いが、それに加えて、看護婦(9施設)や作業療法士(5)、理学療法士(5)、機能訓練指導員(6)、栄養士(2)、音楽療法などの外部講師(2)、ボランティア(2)といった立場の人がレクリエーション活動にかかわっている(図12)。

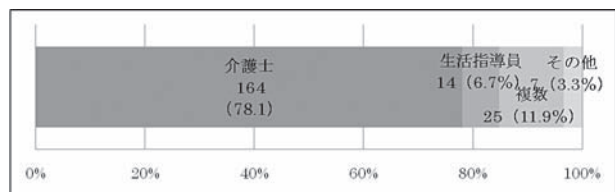


図12 レクリエーション活動担当者の職種

(4) レク活動に入居者の意見を取り入れているか

「レクリエーション活動(行事・イベント)の内容について、入居者の意見を取り入れることはありますか」という設問で、次の選択肢から択一で答えてもらった。

①「あまり入居者の意見や希望をきいていない」が40施設(15.9%)、②「何人かの意見や希望を適宜聞いて、活動内容に反映している」が163施設(64.7%)、③「アンケートや聞き取り調査をするなどして、大勢の希望や意見を聞くようにしている」が35施設(13.9%)、④「代表者・委員などを決めて話し合いに加わってもらったり、主体的に考えてもらっている」が14施設(5.6%)であった(無回答5、複数回答9)(図13)。

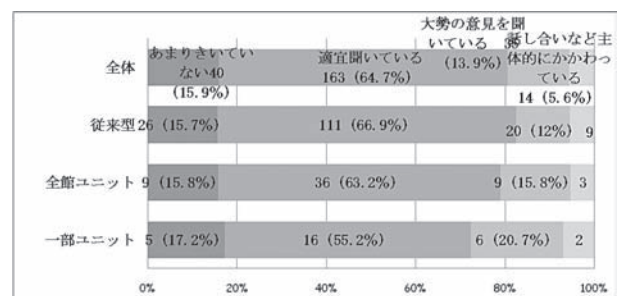


図13 レクリエーション活動に入居者の意見を取り入れているか

(5) 外部から人を招いているか

「レクリエーション活動のために外部から人を招いていますか」という設問に対し、「招いている」と答えた施設は215(81.4%)であった(無回答2)。従来型とユニット型の施設を比べると、ユニット型の方が招いている割合は多くなっている(図14)。

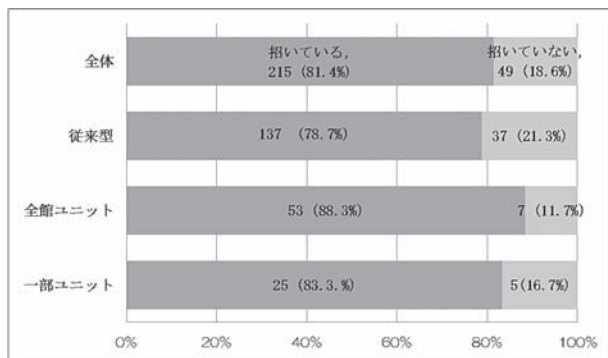


図14 レクリエーション活動のために外部から人を招いているか

前の問いで「招いている」と答えた施設に「どんな人を招いていますか」と尋ね、複数回答で答えてもらった。多い順に、「ボランティア」(180施設)、「園児」(95)、「学生・生徒」(78)である。「クラブ活動などの講師」を招いている施設は70か所、「レクリエーションの専門家」を招いている施設は19か所である(図15)。

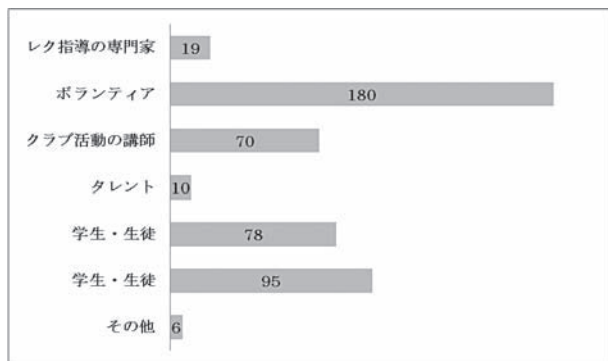


図15 外部からどんな人を招いているか

次に、外部の人をどれくらいの頻度で招いているかを尋ねた。「一週間に数回」が15施設、「1ヶ月に数回」が77施設、「1ヶ月に1回」が65施設、「1年に数回」が51施設、「その他」が3施設という回答であった(図16)。

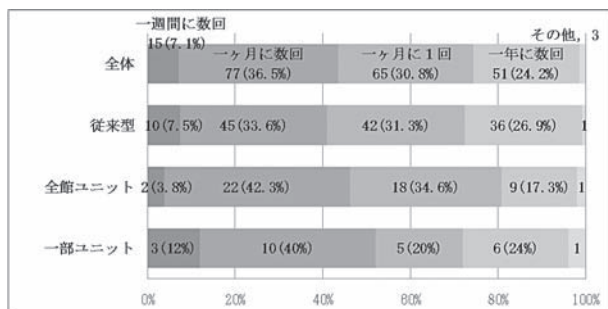


図16 外部の人を招く頻度

(6) レクリエーション活動は活発だと思うか

「貴施設では、レクリエーション活動は活発に行われていると思いますか」と尋ねたところ、①「かなり活発に行っている」と答えた施設が12(4.5%)、②「まあまあ活発」が115(43.4%)、③「あまり活発でない」が128(48.3%)、④「全然活発でない」が10(3.8%)であった(無回答1)。

「かなり活発」及び「まあまあ活発」と答えた施設は合計134(47.9%)と、半分弱が積極的な評価をしている。一方、「あまり活発でない」及び「全然活発でない」が計138施設(52.1%)で、積極的な評価と消極的な評価が半ばしている(図17)。

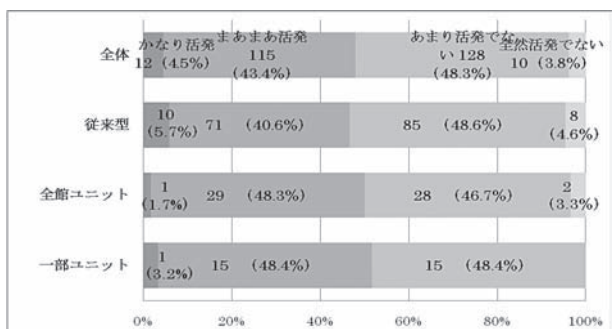


図17 レクリエーション活動は活発だと思うか

次に、前問で「あまり活発でない」または「全然活発でない」と答えた138施設に、「その理由として最も近いと思うもの一つに○をつけてください」と尋ね、次の5つの選択肢から択一で選んでもらった。

①「入居者の要介護度(障害)が重く、できること(参加する人)が少ない」を選んだ施設は、47(34.1%)、②「スタッフが忙しく、レクリエーションまで手がまわらない」が33(23.9%)、③「一人ひとりの活動(対応)を重視しており、みんなで何かするという事はあまりしない」が16(11.6%)、④「他の生活支援が優先され、レクリエーション活動はとくに重要視されていない」が8(5.8%)、⑤「その他および複数回答」が19施設(13.8%)、無回答が15であった。択一で選ぶよう指示したが、複数回答した施設も多く、無回答も多かった。

従来型とユニット型の施設を比較してみると、従来型の施設では、①「入居者の要介護度(障害)が重く…」および、②「スタッフが忙しく…」を選んだ施設が多く、逆にユニット型の施設では、③「一人ひとりの活動(対応)を重視しており…」および④「他の生活支援が優先され…」を選んだ施設が多くなっている(図18)。

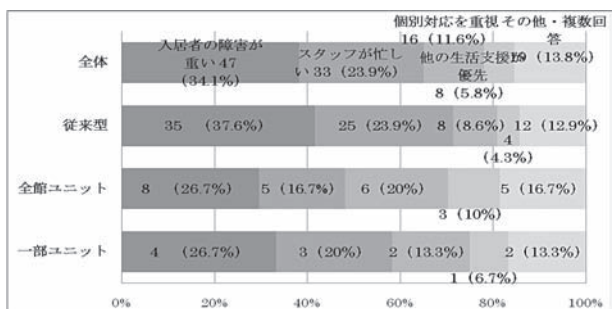


図18 レクリエーション活動が活発でないと思った理由

(7) レクリエーション活動についての入居者の満足度

「施設の提供するレクリエーション活動(行事・イベント)について、入居者の満足度はどうですか」と尋ね、以下の選択肢で答えてもらった。

①「かなり満足しているようである」を選んだ施設は20(7.8%)、②「まあまあ満足しているようである」が209(81.3%)、③「あまり満足してないようである」が28(10.9%)であった(図19)。

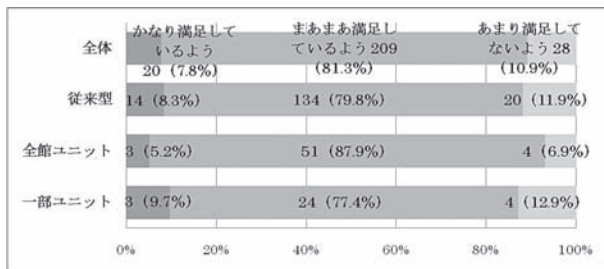


図19 レクリエーション活動についての入居者の満足度

③「あまり満足してないようである」を選んだ施設に対し「それはなぜだと思いますか。具体的にお書きください」と、その理由を自由記述で尋ねた。主なものを次に挙げる。

- ・入居者の重度化が進み、頻度、時間が短い。
- ・できる方とできない方の差が激しい認知症の人が多く、程度も進行している。
- ・レクリエーション活動が適切に行われていない。
- ・時間や職員が確保しづらい
- ・限られたプログラムしかなく、必ずしも主体的に参加してるとはいえない人もいる。
- ・外出やドライブの要望があっても、手が足りない。

以上をまとめると、入所者の満足度を下げている要因として、①レクリエーション活動の回数が少ない、②内容が限られている、③外出の機会が少ない、④能力の差が大きく、参加できない人が多い、ということが挙げられる。

(8) レクリエーション活動の効果

「レクリエーション活動を行うことで、よい効果を与えていると思いますか」と尋ねたところ、①「特に効果があると思わない」を選んだ施設が4(1.5%)、②「多少は与えていると思う」が160(60.6%)、③「かなり与えていると思う」が100(37.9%)であった(図20)。

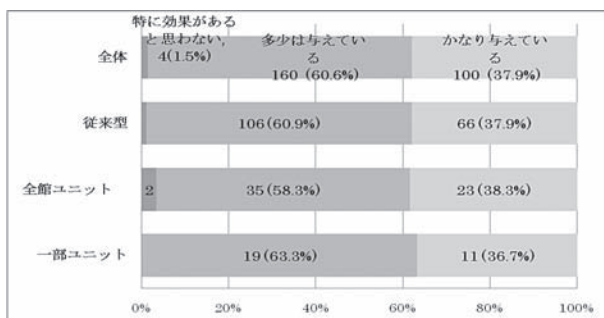


図20 レクリエーション活動がよい効果を与えていると思うか

次に、前問で「多少は効果を与えている」及び「かなり与えている」を選んだ施設に対し、「それはどんな影響ですか。次の選択肢のうち、最もそうだと思うもの一つに○をつけてください」と尋ね、択一で選んでもらった。

①「入居者の健康や心身の機能の回復、維持につながっている」を選んだ施設が24(9.3%)、②「入居者の生活に、はりあいや、変化(気分転換)をもたらしている」が178(69%)、③「入居者どうしの交流が進み、参加する人が楽しみ・いきがいとしている」が23(8.9%)、択一という指示にもかかわらず複数回答した施設が33(12.8%)あった(図21)。

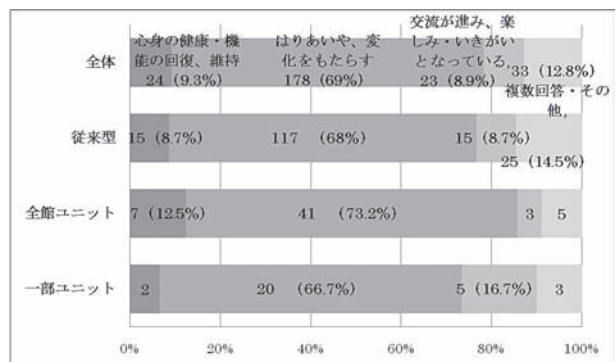


図21 レク活動が生活にどんな効果を与えていると思うか

(9) ユニット型に替わってからの変化

ユニット型の施設を対象に、「ユニットケアが導入される前と後と比べてみて、入居者のレクリエーション活動はどう変わったと感じていますか」と尋ねた。全館ユニットで新たに新設された施設であっても、以前従来型でのレクリエーション活動に携わった経験のある人が回答していることも考えられるので、それも対象に含めてカウントした。

①「活発になった」と答えた施設は、18(25%)、②「活動の機会は減った」が20(27.8%)、③「以前とかわらない」が27(37.5%)であった。

「一部ユニット型」の施設と「全館ユニット」の施設を比較すると、全館ユニットで、「活発になった」および「以前と変わらない」を選んだ施設が、一部ユニットより多くなっている(図22)。

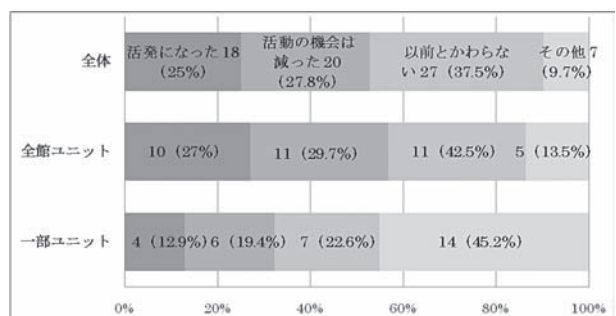


図22 ユニット型になってからレク活動はどう変わったか

続いて、それぞれの選択肢を選んだ理由を自由記述で答えてもらった。以下に主なものを挙げる(表1)。

表1 ユニット型になってからの変化(自由回答)

<p>「活発になった」を選んだ理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人に思いやることができるようになった。 ・個別の外出やレクができるようになった。 ・少人数のレクが増え、短時間のレクができる機会が増えた。 ・従来型のときとは違いさらに小集団になり、活動によっては活発になられる方がおられる。 ・各ユニットで企画実行されるので、少人数であるため、気軽にできる。
<p>「活動の機会は減った」を選んだ理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人出が足りない、忙しく、利用者にかかわれる時間が少ない。 ・集団で行うことより個人でやることの方が多く、1人当たりの機会が減っている。 ・開設当初よりユニットなのであまり変化はわからないが、重度化してきているのは事実で、以前の体制の時期の方が活動も多く、活発で、楽しいものだった。 ・ユニットでほとんど完結してしまうので、レクリエーションのためにユニットからでてくるより、ユニット内で行う機会が多い。
<p>「以前と変わらない」を選んだ理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・空いている時間帯でできるときは随時活動している。 ・個別の生活のリズムに合わせているのでむづかしい。 ・1対1で行うレクリエーションは多くできるようになったが、複数名で行う活動的なレクリエーションは各ユニットからある程度自立した利用者に参加してもらう必要があり、ユニット間での調整や職員の手薄から難しくなった。

以上をまとめると、ユニット型の施設になってから個別の対応ができるようになり、レクリエーションなどの活動も、きめ細かく、一人ひとりの状態や要望にこたえられるようになったという施設もある。一方、スタッフの負担が多くなり、レクリエーションも、ユニット内での活動に限定され、入居者の能力にも制約される傾向も認められる。

(10) レクリエーション活動は今後どうあるべきか

「貴施設でのレクリエーション活動について、今後どうあるべきだと感じていますか」と尋ねた。①「もっと活発にしたい」を選んだ施設は168(67.5%)、②「現状でいい」を選んだ施設は70(28.1%)、③「あまりやらなくてもいい」を選んだ施設は3(1.2%)であった。

従来型とユニット型を比べると、若干後者の方が活発にしたいと答えた施設が多くなっている(図23)。

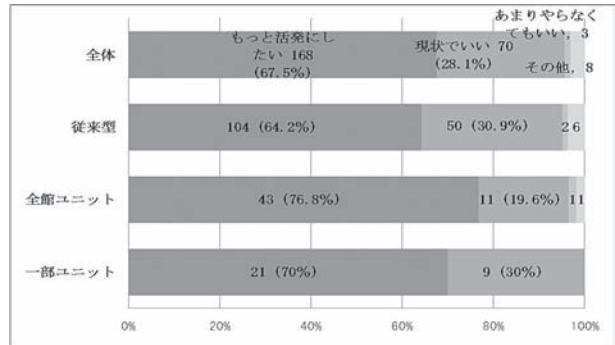


図23 レク活動は今後どうあるべきと感じているか

さらに、「その理由としてどんなことが考えられますか」とそれぞれの選択肢を選んだ理由を自由に記述してもらった(表2)。

表2 レク活動は今後どうあるべきか(自由回答)

<p>「もっと活発にしたい」を選んだ理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集団ではなく、個々に意見を聞き、その方にあったレクリエーションの提供をしたい。 ・認知症の進行予防と、会話ができる方が少ないので、レクリエーションをとおして他者との交流を楽しんでもらいたい。 ・普段外に出られない入所者のために外部との関わりをもってほしい。 ・入所者が時間をもてあましている。 ・生活のはりあい、変化、交流がさかになる。 ・とても喜んでくださる顔をみるとやりがいがあり、今度はどんなものにしようかとワクワクする。 ・身体に障害があったり施設に入居しているから余暇活動が制限されることはおかしい、できるだけ普通を目指して今後企画していく予定です。 ・講座や教室をしたいが講師がみつけにくい、みつかったとしても参加できる方がどれくらいいるか心配。
<p>「現状でいい」を選んだ理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・要介護度が年々上がっており参加できる人も少なく、寝たきりの方も参加いただいているが、内容的には体調的に参加できないことも多くなっている。 ・介護度が重く活動できる利用者がいない。 ・レクをすることが負担になると思うから。

(11) 養成校におけるレクリエーション教育はどうあるべきか

「介護福祉士を養成する学校での教育内容として、レクリエーション援助(利用者の日中活動の支援)のための知識や技術の修得は重要だと思いますか」と尋ねた。

①「かなり重要である」と答えた施設は140(53.8%)、②「まあまあ重要である」は107(41.2%)、③「あまり重要でない」は8(3.2%)、④「重要でない」は5(1.9%)であった(図24)。

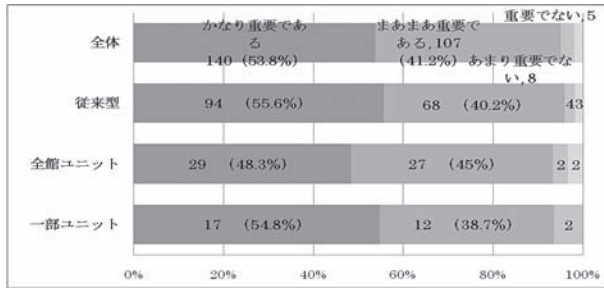


図24 養成校におけるレク教育は重要だと思うか

さらに、「その理由としてどんなことが考えられますか」とそれぞれの選択肢を選んだ理由を自由に記述してもらった(表3)。

表3 養成校におけるレクリエーション教育についての自由記述

<p>「かなり重要である」「まあまあ重要である」を選んだ理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その方にあった生きがいや楽しみを自ら探し実践できない職員が多い。 ・レク支援ができなければ現場での即戦力にならない。 ・エンターテインメント性を養ってほしい。 ・援助技術を学ぶことで笑顔を引き出すような仕掛けができる人材が育成されれば良いと思います。 ・介護福祉士は総合力が評価されるような時代になる。レクは重要なファクターとなる。 ・入居者の日常生活の支援が介護福祉士の使命であり、入居者の自立にはレクは欠かせないので、大いに学習してレクを通じて利用者とコミュニケーションをとっていただきたい。 ・対人援助として大きく作用する部分であり、個々のADLに合わせて援助しなくてはならないので。 ・介護する側と入所者にはかなりの時代の差があり、介護するにあたっては相手の生きてきた過程を遊びの中から知ることも必要。 ・利用者の集団心理や対集団としてのコミュニケーション技術の修得が必要。レクを盛り上げるには高度な技術を要するため。 ・要介護度、認知症のレベルに対応できるレク内容は必要だと思う。又、幼児的なものは嫌うので、その人にあったレクを考えることは大切だと思います。
<p>「あまり重要でない」「重要でない」を選んだ理由</p> <ul style="list-style-type: none"> ・役に立ったためしがない。 ・心の持ち方が重要で、技術などを修得する科目は不要である。 ・当人の気持ちはわかりませんが、ボール遊びや幼稚なレクは楽しいのでしょうか？ 介護の学校卒の方は上記のようなレクを企画する方多いです。レクってその人それぞれで違うことだと思います。普通の感覚のまま企画したらよいのでは？ ・レクリエーション以前の基礎学習をしっかり行ってほしい。現場では、習得した技術を提供するにはギャップが大きい状況であり、活かさない現状がある。

3 考察

(1) 全般的な状況

われわれは、1995年に、岐阜県の福祉施設(高齢者・障害者の施設)を対象に、施設でのレクリエーション活動の状況を把握しようと質問紙による郵送調査を行った(稲垣ほか1995)。その時点での県内のすべての特別養護老人ホームも対象にし、34施設中26施設から回答が得られた(回収率76.5%)。内容は、今回の調査と重なる部分も多く、サンプル数は少ないが15年前の状況と比較できることもあるので、適宜その調査の結果を比較対象としたい。以下この調査を「岐阜調査」と略称する。

さらに、同く1995年の山本らの調査では、鹿児島県内の特別養護老人ホーム52施設を対象に、細かい把握が試みられている(山本ほか1996)。こちらの結果も、参考にして適宜言及したい。以下この調査を「鹿児島調査」と略称する。

今回の調査の結果では、レクリエーション活動をおこなっている施設は90.3%であり、毎日日課として何らかの活動をおこなっている施設は75%と、大半の施設で日中の活動の支援がなされていることがわかった。鹿児島調査では、88.5%の施設が行事としてレクリエーション活動を行っているという結果があり(山本ほか前掲:75)、また岐阜調査でも、92.3%という結果であった(稲垣ほか前掲:241)。

クラブ活動としては、われわれの調査では、56.9%の施設が行っているのに対し、鹿児島調査では、65.3%(山本ほか前掲:75)、岐阜調査では57.5%(稲垣ほか前掲:241)と、6割程度の施設でクラブという形態の活動が行われているという結果であった。

外出の機会について、今回の調査では、外出して社会資源を利用している施設は87.2%と、その機会も多いといえるが、入居者の重度化も進み、特定の人に限りたり、頻度も月1回あるいは年数回と限られている状況がある。

岐阜調査では、外出の機会が少ないことが今後の課題であるという結論に達したが(稲垣ほか前掲:242)、特養についてみると、42.3%の施設が月数回、46.2%が年数回の外出の機会があると答えており、頻度としては少なかったわけではない(稲垣ほか前掲:242)。

活動の評価としては、われわれの調査では、「レクリエーション活動は活発に行われていると思うか」と聞いて、それに47.9%の施設が「活発だ」と評価している。鹿児島調査では、46.9%の施設が、行事としてレクリエーション活動について、「非常に充実している」あるいは「まあまあ充実している」と答えている(山本ほか前掲:75)。

以上のことから、現在の施設でのレクリエーション活動の頻度や内容は、15年前と変わっていないようである。しかし、近年、福祉全般、とくに入所施設において、入居者の権利、QOL、満足度、サービスの質といった

ことが重視され、様々な形で改善されてきており、レクリエーション活動支援の方法についても研究が蓄積され、研修会などにより浸透しているということを考えれば、レクリエーション活動をめぐる状況は良くなってきているといつてよいのではないだろうか。今回の調査でも、前述のように、入居者の意見を取り入れたり、主体的にかかわるよう工夫がなされ、満足度も高い傾向が認められる。

(2) 重度化・個別化

今回の調査の回答、とくに自由記述から、さまざまなレクリエーションの実情や課題が浮かび上がってきた。その主なものをキーワードでまとめると、「重度化」と「個別化」となる。

今回の調査では、「レクリエーション活動は活発に行われていると思うか」と聞いて、「あまり活発でない」または「全然活発でない」と答えた138施設に、その理由を尋ねたところ、47施設(34.1%)が「入居者の要介護度(障害)が重く、できること(参加する人)が少ない」を選んだ。それ以外に、調査票のいずれかの自由記述欄に入居者の「重度化」について言及した回答は、23施設を数える。その中には、「療養型病床群から移動してくる人が多い」あるいは「以前からの入居者が高齢化するにつれ心身機能の低下が進んでいる」という記述があり、重度化が切実な問題であることがうかがえる。

岐阜調査では、入居者の6割以上が重度の人と答えた施設が61.5%を占め、自由記述でも、重度化に言及した施設が2あった(稲垣ほか 前掲:236)。鹿児島調査でも、「身体的側面よりみる阻害要因(肢体不自由、不随意運動などがレク活動を実践する上での阻害要因)」として、「かなり関係してる」と答えた施設が34.6%、「関係している」が44.2%であると報告されており(山本ほか前掲:78)、入居者の重度化がレクリエーション活動を促進するうえでの阻害要因の主たるものの一つとして捉えられている。

以上から、入居者の障害の「重度化」は、今後のレクリエーション活動の在り方を考える上で、重要なポイントであると言える。

また、「認知症」も重要なキーワードである。今回の調査票には認知症について設問した項目はないが、自由記述欄のいずれかに「認知症」に言及した回答は7あった。たとえば「認知症の方が増えており、レクリエーションの内容も認知症の特性に対応したものを考えねばならない」という記述があり、認知症への対応の必要性がうかがわれる。

「個別化」「個別対応」という言葉を自由記述欄で挙げた回答は17あった。ユニットケアで具体化が目指されているものであるが、従来型の施設でも、重度の人や認知症の入居者が増えるにつれ、個別に対応することが求められており、レクリエーション活動についても、「まず個別ニーズを把握しそれに基づいて計画すること」が重要だという記述があった。

(3) スタッフ・支援体制について

レクリエーションを担当するスタッフについては、専門の担当者を設けているところが14.8%、スタッフの中で担当(当番・委員など)を決めている施設が66.2%であった。

岐阜調査では、レクリエーションの専門的な知識のあるスタッフがいる特養は34.6%であるという結果が示され(稲垣ほか 前掲:236)、専門的知識を持った職員が少ないことが指摘されている。

鹿児島調査では、「日常のレク活動を実践している職員の平均人数は、当日のレク活動担当者を含んだ1~3名が44.2%となっており、施設内においてレク活動に携わることのできる人数の少なさが伺える」と報告されている(山本ほか 前掲:74)。

1995年当時は、特別養護老人ホームはじめ福祉施設では、レクリエーション活動はさかんになりつつあったが、まだレクリエーションを専門に担当するスタッフは少なかった。現在は、職員の研修の機会も増え、ボランティアや講師などが外から訪れて活動を支える機会も多くなっており、生活指導員や作業療法士をはじめ、さまざまな職種のスタッフが、レクリエーション活動についての理解を深め、複数でレクリエーション活動にかかわっている状況がうかがわれる。

施設でのレクリエーション活動は、その施設の入居者の状況や意向、スタッフの資質や勤務の条件等に規定されることも大きいですが、その施設の処遇や援助についての基本方針、さらに個々のスタッフの考え方により左右されることもあるだろう。今回の調査の回答には、レクリエーション活動に対する前向きなコメントが数多くみられた。その意味でも、支援体制の現状あるいは将来を積極的に評価することはできるのではないかと考えられる。

(4) ユニット型と従来型の比較

ユニット型になってから、レクリエーション活動はどう変わっているのだろうか。それを把握することが今回の調査の狙いの一つであった。われわれの仮説は、ユニット型の施設では、従来型に比べてレクリエーション活動の機会は減っているのではないかと、というものである。その理由として、ユニット型の施設では、個別の生活支援が重視され、集団活動よりも個別の活動が重視されるようになり、スタッフも個々の入居者の生活支援に追われ、レクリエーションまで手が回らない状況があるのではないかと考えた。

今回の調査で、ユニット型になってからのレクリエーション活動の変化を尋ねたところ、前述のように「活発になった」という回答と「レクリエーションの機会が減った」という回答が相半ばするという結果となった。「レクリエーションの機会が減った」と回答した理由として、ユニット型の施設では「人出が足りない、忙しく、利用者にかかわれる時間が少ない」「以前の体制の時期の方が活動も多く、活発で、楽しいものだった」という記述が見られた。

一方、入居者のレクリエーション活動が「活発になった」理由についての自由記述には、「少人数のレクが増え、短時間のレクができる機会が増えた」「従来型のときは違いさらに小集団になり、活動によっては活発になれる方がおられる」「ご利用者の希望が受けとりやすく、ニーズに合わせるのがしやすと思う」というものがあり、従来型と比べ、レクリエーションがやりやすくなり活発になった施設もある。

ある調査によると、従来型からユニット型に替わったある施設において、介護スタッフの行動の変化を調べたところ、「入居者の余暇・交流に従事している時間」が、従来型のときは職務時間全体の20.3%だったのが、ユニット型では24.1%に増えたということである(外山ほか2002)。以上のことから、「ユニット型の施設ではレクリエーション活動の機会は減る」というわれわれの仮説は、支持することはできない。

ユニット型になってからのレクリエーション活動の変化についての自由記述には、以下のようなものがある。

- ・クッキングや外出はとても頻繁になった。
- ・従来型ではイベント型として位置づけていたがユニットでは日常生活場面で展開していることが多い。
- ・同じくらいの介護度の利用者が集まって会話をたのしみ、作業を共同したりできていたのしい時間となっている。
- ・フロアに行けば交流ができる、なにかができるという期待感がある。

以上のことから、ユニット型の施設では、これまでの集団での活動よりは個々の対応に重点が置かれ、レクリエーションの内容も個別の希望やニーズにあったものが多くなり、入居者の交流を促進するという効果も見られるが、一方、スタッフは忙しくなり、なかなかレクリエーション活動の支援まで手が回らない施設もある、ということが言える。ユニット型が始まってからまだ日は浅く、どのようにレクリエーション活動を考え、進めていくかという情報提供や調査・研究をこれから進めていく必要があるだろう。

(5) 養成校におけるレクリエーション教育について

今回の調査で、介護福祉業務の現場は、レクリエーション活動をどのようにとらえており、さらにレクリエーションについての教育をどう考えているかを把握したいと考えた。前述のように、介護福祉士の養成校でのレクリエーション教育について多くの自由記述があり(なんらかの記述があった回答は131、49.2%)、そのほとんどが、養成校でのレクリエーション教育を肯定的に捉えるものであった。養成校としては、「レクリエーションの知識や技術を身につけた人材が求められており、その教育についても期待されている」という認識をもつべきであろう。

具体的には、「具体的なスキルを身につけてほしい」、「実際に前でゲームなどを指導できない職員が多い」など、即戦力となる人材や現場ですぐに活かせる技術の修

得が求められている。

また「レクリエーション以前の基礎学習しっかり行ってほしい」という記述に代表されるように、基礎的な力を養ってほしいという要望もある。特に、「コミュニケーション」力が求められている。自由記述において「コミュニケーション」という言葉を使った回答が15あった。ここでは、「まずは入居者との基本的な関係を築いたり会話を楽しむことが重要」であり、レクリエーションを介して、その様な力を養っていくことが必要だということが異口同音に述べられている。

また、レクリエーション支援を、「対人援助では重要な部分」、「総合力が評価される介護職としての重要なファクター」など、介護職の基本的なスキルとして捉えている記述もあった。さらに、「個々のニーズにあった活動を企画できる力」をつけてほしいという声もあった。

介護福祉士養成校のカリキュラム上の「レクリエーション」科目は廃止されたが、このように現場からの期待は大きい。これからの時代の変化を見据えて、個別援助や、認知症への対応といったことも考えつつ、教育現場として新たな「レクリエーション」像を明確に描き、何ができるか、何をすべきかを考えなければならない。

おわりに

今回は、介護老人福祉施設のレクリエーション活動に的をしぼり、その実態およびスタッフの考え方を把握し、また介護現場の日中活動についての新たな課題や動向を浮き彫りにすることを目指して、アンケート調査を行った。その結果、「入居者の重度化への対応」「個別のニーズへの対応」など、いくつかの課題が明らかになった。また、介護福祉士の養成校でのレクリエーション教育についても現場からは重要視されていることがわかった。今後の養成校での教育を考える上で、大いに参考になる知見が得られた。

今後の課題としては、さらに枠を広げて、デイサービスなども対象にした詳しい調査を試みたい。最後に、今回の調査に協力いただいた施設のみなさまに、ここで感謝の意を表しておきたい。

参考・引用文献

- 稲垣貴彦、結城俊哉、仲村正巳(1995)「岐阜県の福祉レクリエーションの実態調査」『中部女子短期大学紀要』Vol.25、233-248。
- 外山義ほか(2002)「普及期における介護保険施設の個室化とユニットケアに関する研究報告書」(財)医療経済研究機構。
- 山本清洋・黒木邦弘・高橋信行・山本良江(1996)「特別養護老人ホームに於けるレクリエーションの現状：特別養護老人ホーム、高齢者レクリエーション、福祉レクリエーション」『鹿児島大学教育学部研究紀要(人文・社会科学編)』Vol.47、71-88。